

藤沢周平の『一茶』

Keigo Ikeuchi 池内恵吾



最明寺は、一茶ゆかりの寺として知られる。一茶像の奥の句碑は「臘々ふめば水也まよひ道」。

藤沢周平（昭和二年〜平成九年）一九二七〜一九九七）は、江戸の市井に生きる男女の哀歓や、小藩の内紛のなかで武士道を貫く下級武士などを描いた時代小説の名手である。いっぽう、資料を丹念に読みこみ、取材を積み重ねて書く伝記文学の分野でも名作を残した。『一茶』は、長塚節の生涯を描いた『白き瓶』と並び称される伝記小説である。

小林一茶（一七六三〜一八二七）は、いまも最も親しまれている江戸期の俳人だ。しかしこの小説に描かれた一茶は、痩せ蛙や蠅にやさしい目を注ぐ「一茶の小父さん」ではなく、田舎者の劣等感と貧困に苦しみながら、金の匂いに敏感にすり寄る俗臭たる男。後半生では、実直な農民として生きてきた異母弟から、父の遺言を盾に財産の半分を取り上げる、無頼の徒ともいえる人物である。

『一茶』は、昭和五十二年に「別冊文藝春秋」に連載された四部構成の長編。第一部では、十五歳で信濃の農村から江戸へ出た弥太郎（一茶の幼名）が、堅気の奉公になじめず職を転々とするなかで、賞金目当てに始めた俳諧の魅力に目覚めてゆく。この時代の経歴を明らかにする史料は乏しく、藤沢

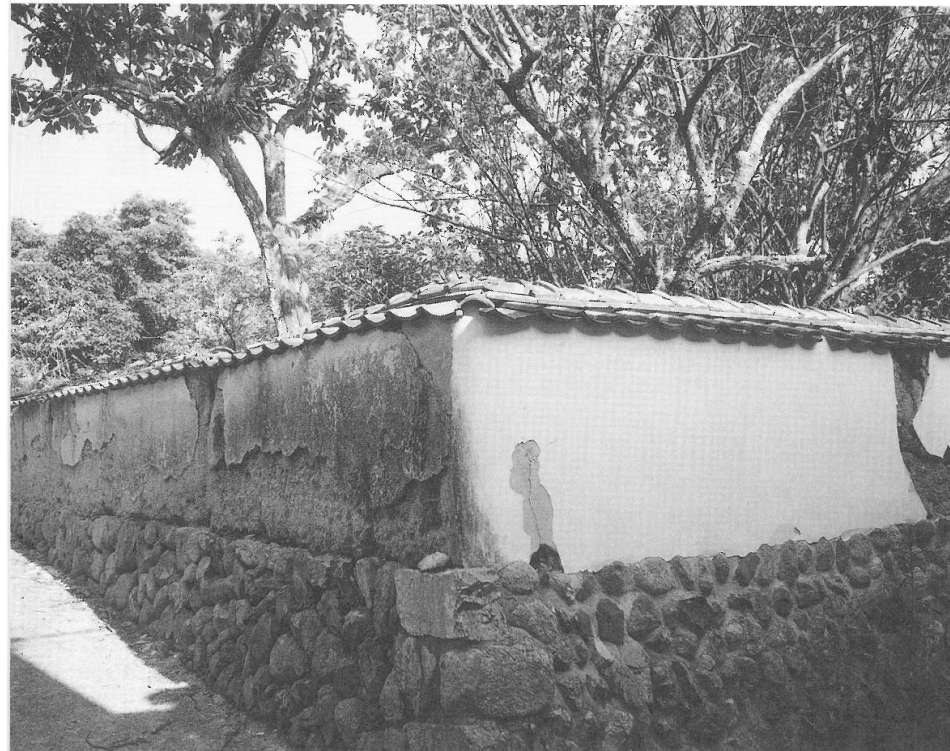


五井邸の一茶句碑「月鑑よき門探り当た
るぞ」。一夜の宿を得た感謝の心をこめ
た挨拶句である。

と百済魚文を訪ね、竜徳寺の十六日桜
を見物することである。この旅の二か
月近い足跡は、一茶が残した『寛政七
年紀行』によって判明している。藤沢
はわずか数行の一茶の記述から、作中
人物を自由に動かし、生き生きと会話
させる。

風早郡難波村の宿として当てにし
ていた西明寺の住職茶来は、十五年前
に亡くなっていた。新住職に一夜の宿
を断られ、門を出ようとすると一茶に寺
男が救いの手を差し伸べる。

「それなら庄屋さんをたずねたらいい。
竹阿さんがよく来ていた家だ。」
一茶はあわただしく懐をさぐって
竹阿の手控えの写しを出した。月の光



一茶が泊まったころの面影を伝える高橋五井旧居。「五井」の俳号は、茶の湯の良水を求めて邸内に井戸を五本掘ったことに由来する。

にかたむけて見ると、難波村、西明寺
茶来と書いた下に、小さく五井と書い
てあった。」

一茶は、俳人五井こと庄屋の高橋伝
左エ門宅で歓待される。

翌々日には松山に入り、楞堂の案内
で十六日桜を見、道後温泉に入浴。魚
文宅では、自慢の芭蕉、其角、素堂の
三幅対を見せられる。二十日ほど過
し、旅で集めた句を選集として板行す
るべく京をめざす一茶に、楞堂は松山
再訪をすすめた。

「ありがたいございます。ひよっと
すると、松山を思い出して、ふらりと
舞いもどるかも知れません。その節は
またお世話願います。」

一茶はそう言ったが、そのときは実
際に翌年また松山にきて、江戸に帰る
のがさらにその二年後になるとは、夢
にも思わなかったのである。」

実際の西国の旅は六年におよんだ
が、この小説に描かれているのは伊予
での一茶だけ。陰鬱な感じの全編のな
かで、四百字詰め二十二枚あまりのこ
の部分は、不思議に明るい。

もうひとつ注目したいのは、冒頭か

ら「弥太郎」で通してきた主人公の名
を、伊予の章から「一茶」に変えてい
ることである。

藤沢周平は、二十代のころ療養所で
俳句雑誌「海坂」に出会い、実作に励
んだ。その期間は短かったが、その後
も生涯、俳句に親しんだ。俳句に関す
る大量の読書を通じて、作家としての
目が「人間一茶」に着きつけられたの
が、この小説が生まれた動機であろう。

昭和五十三年に「俳句」に書かれた
「小説『茶』の背景」には、「一茶は、
必ずしも私の好みではなかった。私は
どちらかといえば蕪村の端正な句柄
に、より多く惹かれていた。だがある
とき、一茶の句ではなく、生活にふれ
て二、三の事例を記した文章を読んだ
あと、一茶は私の内部にどことなく気
になる人物として残った。」とある。

北条市の難波地区では、「茶生誕二
百年の昭和三十八年に西明寺（現最明
寺）、高橋五井旧居などに句碑が建立
され、一茶の歩いた道筋は「一茶の道」
として整備されている。藤沢周平のこ
の作品は、一茶と風早の縁を、さらに
深めたと言えるのではないだろうか。

いづち・けいこ 松前町出身。元愛媛放送（現取
締後、退任後）も同社の「スーパー・ニュース」の
俳句コラムを書きつづけている。俳人協会会員、
放送批評懇談会会員。

は自由な想像で空白を埋めている。

寛政四年（一七九二）、三十歳のと
き一茶は俳諧師として名を売るため、
西国行脚の旅に出た。第一部の最後の
二章に、伊予路を歩く一茶の姿が描か
れている。

「寛政七年正月十三日の暮れ方。風
早郡内の伊予路を、僧とも俗ともつか
ない難髪の男が歩いていた。いまは一
茶あるいは一茶坊と名乗って西国をめ
ぐり歩いている弥太郎である。（中略）
伊予路の春はあたたかかった。日は瀬
戸内の島島の陰にかくれようとしてい
たが、海からくる風はあたたかく、道
ばたの草は花をつけていた。」

江戸での一茶は、豪商で高名な俳人
である夏目成美の庇護を受けながら、
二六庵竹阿の留守宅に住みつき、竹阿
が亡くなると勝手に「二代目二六庵」
を名乗った。竹阿は江戸葛飾派の俳人
だが、旅回りが多く地盤は西日本にあ
った。一茶は竹阿の遺稿「其日ぐさ」
と留守宅で発見した手控えを頼りに、
上方や四国、九州の俳人を訪ねては宿
と食と路銀にありついていった。へ予想
したとおり、西国は二六庵竹阿が残し
た米櫃だったのだ。

伊予路に足を踏み入れた目的は、竹
阿と親交のあった松山城下の栗田楞堂、